

# 日本語教育と森鷗外

蓮沼啓介（神戸大学名誉教授）

## 【要約】

軍医監ロート相手の日本語教育とその背景を論じたものである。独英日の協調を模索する動きの中にロートや鷗外は位置していた。だが橋本綱常による復古国学の確立は日独と英米を対立させる方向に向かい、鷗外に不信の目を向ける動きの源となった。『舞姫』を鷗外の自伝的な作品と見る見方は片寄ったものであるが、これは鷗外への不信が凝固した結晶の産物である。

## 1. 軍医監ロートについて

『独逸日記』から抜粋する。10月11日徳停に達す。「十二日。・・午前十時軍医監ロートを訪ふ。」13日講習始まる。30日地理学会。「ロオト氏麻拉利亞地方論を演ず。」「(11月)八日。ロオトの家に招かれて晚餐す。ロオトに家族なし。愛犬あり。卓に近きて食を求む。・・」「十八日ロオトの家に晚餐す」。19日「衛生将校会。」12月23日徳停を發し来責に赴く。

ロオトは1833年にベルリンの南方で生まれた。ベルリンの軍医学校の出身であり、1870年にザクセン王国の第十二軍団の軍医部長に招かれ、ドレスデン職業学校の教授も勤めている。1892年死去。鷗外と出会った時に52歳であった。鷗外は23歳であった。衛生学に志し、『陸軍衛生学全書』三巻を著している。ロオトは松本順とも橋本綱常とも面識があり、鷗外を頼むという推薦状を二人から受け取っている。

鷗外はロオトたちに日本語を教えている。「(1月)四日。軍医監ロオトの需に応じ、一週五時間日本語を教授す。教授はロオトの家に於てす。之に与る者はマイエル B.Meyer キルケ Georg Wilke 及ロオトなり。」「(2月)三日。日本語の教授を終る」。

Wilke について。10月25日には「キルケ Wilke とロオトの家に午餐す。キルケは三等軍医にして衛生司令部・・・に奉職す云々。」と見える。また「三等軍医キルケ」と11月22日(日)の記事に見える。23日には「始て雪ふる。医師キルケに就いて西言語を学ぶこと此日より始まる」とある。

Meyer について。11月26日に人類学博物館の館長と見える。「マイエルは医学士なり。後専ら博物学及人類学に従事す。」とある。

## 2. ドイツ三部作の教材性

擬古文を教材としてどう使うか。

雅文体で書かれている。美文であるし、非俗である。古典語への入門となる。日本古典に漂う異界性と文学の持つ超俗性をくっきりと示す。神仙やひじりまた妖怪変化の群がり行き交う世界である。

『舞姫』を始めとするドイツ三部作に漂う異界性、他界性そして彼岸性。ドイツ三部作はドイツ婦

人をヒロインとする。常世の国つまり地上の楽園や楽土を描いた作品である。鷗外にとって留学先のドイツはこの世の楽園であり、常世の国であった。その楽土が忽然として消え去ってしまった。楽土の喪失という体験を刻印した作品である。

日本事情を良く示す作品である。浦島太郎は常世の国から現世へ帰ってくる。開けてびっくり玉手箱。『舞姫』の中には舞姫はいない。亜リスという薄倅な踊り子がいるだけである。

『舞姫』は青春小説であり、文学の誕生を画する傑作である。『うたかたの記』と『文つかい』と合せて青春を描く作品である。青年の自我の目覚めを配偶の探査に求める作品群である。自分の感情を自覚し感情に従い運命を決める。人生の岐路における選択の規準を意識にのぼせる心理を描き出して青春時代の彷徨と蹉跎を描き上げる。これが青春小説である。

### 3. 鷗外の何が問題なのか

鷗外には秘密が多過ぎる。それはなぜなのか。

日独交流には光と闇がある。学問と芸術の国ドイツは軍国主義のドイツでもあった。ナチスの凶暴性や東西分断の時代を経て経済大国ドイツに至っている。

学問と芸術の国はゲーテやシラーの国であるし、バッハやモーツァルトの国である。そしてカントやヘーゲルや Max Weber の国であり、ガウスやカントールそしてフレーゲを生んだ国である。だが政治文化の狂信性は否めない。既にマックスヴェーバーがカリスマ論と神義論を展開している。皇帝ヴィルヘルム二世の野望やアドルフヒットラーの狂信性はおぞましく記憶に残っている。

ドイツはどこで躓いたのか。

その鍵は橋本綱常と森鷗外が握っている。二人には明白な対立軸が認められる。絶対主義と自由主義の対立であるし、また近代以前と近代精神の対立でもある。橋本綱常の幸運と狭量がすべての源である。偶々偶然が重なって軍医総監になれたに過ぎない。だがその間に 1889 憲法が成立した。橋本綱常は狭量である。森林太郎の直訴を無下に断る。息子である橋本春を随員に加えるためにである。だが橋本春は強制的に女友達と別れさせられ、気が狂ってしまう。生ける屍として帰国している。

1889 憲法の反動性は有名であるが、これは尊王攘夷の思想が一時的に復活し憲法条文に書き込まれたためである。しかも天皇にしか改正ができない欽定憲法であったから変えようもなかった。橋本綱常が絶対主義の創ったプロイセン軍の組織を模倣した。その際に江戸時代には名門の祭主であった天皇を絶対君主の座に据えた。プロイセン軍は典型的な近世常備軍であった。文明開化の日本は絶対王政の時代に引き戻されてしまうのである。

森林太郎の闘争がここから始まる。鷗外は精神の自由を求めて戦闘を開始した。信仰強制を定める帝国憲法の第三条が敵つまり攻撃目標であった。

橋本綱常との対立は深刻であった。

カイザーの失敗が事態を悪化させた。フリードリッヒ三世の早逝は主治医の誤診の結末である。フリードリッヒ三世はロートへの信頼が厚く鷗外へも信頼を寄せていた。森林太郎は先帝の死去の翌日から軍医として活動している。これは新帝が鷗外の軍医としての勤務を認可したからである。

カイザーの誤算がこれに続く。ヴィルヘルム二世は判断を誤った。帝国日本の躍進の原動力は文明開化の努力にあった。ところが帝国憲法の第三条に定める神聖王の思想が躍進の源であると誤認した。これは橋本綱常の悪影響であった。歴史的な反動現象を進歩と取り違えた。

神聖王の理想の行き着く先は醜悪かつ悲惨であった。まず殺人兵器の製造が始まる。タンクと毒ガスが大量に生産される。また人種主義が広まる。優生学による劣等人種の発見がこれを押し進める。黒人や朝鮮人は劣等な人種である。また戦争が変質する。自国を守る正当防衛の戦いから殺し合いや皆殺しへ全てが変質する。二十世紀の惨禍はここから生まれた。皆殺しという思想の行き着く先はアパルトヘイトやラーゲリそして広島・長崎である。ISはその残滓である。異教徒は皆殺しにするという恐ろしい思想がここに残存している。

その源は1889 憲法第三条である。カイザーの判断ミスが巨大な惨禍を招いた。

#### 4. 二十一世紀の希望

過ちを直すには原因を正す必要がある。まず橋本綱常の幸運と偏狭を再確認する。その上で森鷗外の戦闘を再現する。ドイツ三部作を読み直す。軍医監ロートと森林太郎の友情を見直す。フリードリッヒ三世の急逝を惜しむ。

何が大切か。信義と友情から再出発する。ミュンヘンから飛び立つ。狂信から確信へと歩を進める。中世への憧れを翼に西欧近代を越える。ヒットラーの妄想を捨てルードヴィッヒの夢にまで遡る。近代から中世にまで一旦戻る。

また文学生誕の地を訪ねる。江戸城と太田資長を思い起こす。道灌入道は僧名である。猫の家は太田の原にあった。

猫の家は文明批評の聖地である。「文つかい」と「吾輩は猫である」はここで生まれた。『文つかい』の構想は帰国の船旅の中で生まれたと推計される。エリーゼの決断力を見てイダ姫の造形が行われた。エリーゼは精神の貴族であった。金髪碧眼のペルシャの姫君の再来であった。太田資長は武将にして歌人であった。森林太郎の目指す目標であった。文学の聖地にふさわしい人物である。

文学の聖地とは掛け替えのない自分と愛しい人を発見する場所である。文学とは小説を読みかつ書く営みである。虚構の作品を創作し読解する企ての謂いである。光源氏には濃密な恋愛感情が溢れているが、恋愛感情の自覚は欠けている。官能が優雅に疾走し時に暴走する世界に生きる人である。「浮き雲」の文三には青春の輝きが足りない。青春の蹉跎に止まっている。「浮き雲」において文学は誕生の前夜を迎えた。夜明け前を迎えた。『舞姫』と『三四郎』は儂い恋心を描く作品である。結ばれぬ恋ははかない。だがはかない恋は真実の恋である。その時の恋心は確かなものである。自ら感じ味わいそれと気付いた心のうごめきでありときめきであった。亜リスの恋心には偽りはまったくないし、里見美禰子の戯れにはかすかな淡い恋心が雑じっていた。

猫の家は世俗を離れた草の庵であった。文学が誕生する。「舞姫」と「三四郎」は青春小説である。日本文学の誕生を画する作品である。古典は歌・物語であって未だ文学ではない。自意識（の過剰）が文学である。恋愛感情を自覚する時、文学が発生する。恋愛の自覚が小説を創作する原点であり、

原動力である。作家の恋心が文学を産む。恋心と創作はどう関連するのか。

鷗外とヘミングウェイを対照してみる。「武器よさらば」はフレデリック・ヘンリーとキャサリン・バークレイの恋愛物語である。イタリア兵に志願したアメリカ人青年であるフレデリックは負傷してイギリス人の従軍看護婦であるキャサリンと恋に落ちる。ヘミングウェイ自身も戦場の恋を味わっている。

#### 4. 1 恋愛体験と創作はどう関わるのか

赤十字の体験が決定的である。日常を遥かに越えた領域に二人とも踏み込んだ。そうした異界において異様な恋愛体験が始まる。砲撃による負傷と入院生活の不安がヘミングウェイの心を恋心に染めてしまう。やがて引き離された二人の文通は激情に彩られる。破局の手前にたちまち近づく。恋の相手はアグネスである。

アグネス・クロウスキ。ヘミングウェイがアグネスに宛てた手紙はアグネスの夫の希望に沿ってすべて燃やされてしまったが、ヘミングウェイはアグネスからの手紙を大事にして大切に保管していた。従ってヘミングウェイとアグネスが恋愛関係にあったことは早くから分かっていた。しばらく対話編を模して見る。

「アグネスってイギリス人なの」

「いや違う。アグネスはアメリカ人の看護婦で赤十字に所属して従軍看護婦としてイタリア戦線に派遣され看護の業務についていたんだ」

「アグネスの父親はドイツ系のポーランド人でケーニッヒベルクの生まれだし、母親はアメリカの軍人さんの娘で、ドイツ語学校で知り合いに成った。そういう関係だよ。父親が母親のドイツ語の先生だったんだってさ。」

「何でヘミングウェイと知り合いになったの」

「そのいきさつは長く分からなかったんだ。でもアグネスの日記が発見されて戦場で重傷を負って赤十字病院に運び込まれた時点や初めての出会いの日付まで刻明に確認することができたんだ」

「武器よさらばにおけるフレデリックとキャサリンの恋愛模様が成熟した大人の恋愛を描いているのとは打って違って、まだ幼さの残る青年と年上の働く女性との可愛らしい恋愛が日記には綴られていたのさ」

「ヘミングウェイはいくつだったの」

「まだ十九才さ」

「そうか。まだ高校生みたいな年令だったんだ」

「日記を読んでも二人が身も心も結ばれるといった感動的な場面は見当たらず、二人の関係は清純な形に止まっている」

「ヘミングウェイの実際に味わった恋愛体験に照らすと、武器よさらばの恋愛は遥かに成熟した大人たちの恋愛であり、それ故二人は固く身も心も結ばれる。そうしてその結果としてキャサリンは子を宿し、フレデリックとキャサリンは恋の逃避行に走る。戦場を後にスイスへ逃亡する。だがスイスに

は運命が待ち受けていたという訳さ。難産の末にキャサリンと子供は死亡する。これが武器からの逃走の果てに待っていた運命さ」

「ヘミングウェイも恋人とは別れたの」

「うん、振られたんだ。何と言っても年下の少年だから。一度は本気で結婚する意思を固めたものの、アメリカに戻ってから真剣に就職先を探すでもないままにぶらぶら親元に暮らすという有様だったから、こんなにまだ未熟な青年とは結婚生活は送れないとアグネスは苦い決断を下さざるを得なかった。ヘミングウェイは振られたということさ。結婚したことを告げる長い手紙を受け取って読み終えてから一週間も部屋に閉じ籠ったままだったという話さ」

「凄く落ち込んだんだろうね。もう立ち直れない位のダメージを受けたんだ」

「武器よさらばでは成熟した男の恋愛を創作して自分の未熟さを空想の世界で克服しようと図ったのかも知れない。恋人を失うという喪失感だけは見事に捉えていて完全に描き切っているね」

自分は未熟だった。恋人を喪失する時、文学が産まれる。作品は恋人の代わりである。アグネスよさらば。埋めがたい空虚が作者の内心に発生する。空虚を埋めようと創作が始まる。武器よさらば。恋人よさらば。恋愛体験が文学を産む。文学は恋愛体験を越える。作家の恋が恋愛小説を生み育む。

#### 4. 2 鷗外の恋愛と『舞姫』

万国赤十字の大会が鷗外を異界へと誘い込む。国際会議での大成功が鷗外の心を日常の彼方に運んでしまう。鷗外は常世の国に流れ着く。プロイセン軍舎での軍医としての勤務と仕事のあとはプロイセン兵士の娘との交際が始まり続く。ブラーゲルの著書である『陸軍医事制度書』の細部の意味合いが次々と判明する知的冒険の日々であるし、またベルリン市民の日常の細部を見聞きし自らも味わうことの出来る日々でもあった。

鷗外の恋人であったエリーゼと『舞姫』のエリスは別人である。

エリスとは誰なのか。エリスは『舞姫』に登場する女主人公である。エリーゼはベルリン娘であり森林太郎の女友達である。『舞姫』の主人公である大田豊太郎には二人の实在のモデルがいる。森林太郎と武島務である。帰路の船中で懺悔を行い生い立ちを語る部分の大田豊太郎のモデルは森林太郎であるが、エリスと恋に落ち讒言により免職となり艱難を重ねる部分のモデルは武島務である。エリスの实在のモデルはエリーゼではなく、その妹のクララである。クララは身ごもって出産している。この事実がその証拠である。『舞姫』はクララと武島務の悲恋を題材とする悲劇である。森林太郎は恋人エリーゼとの別離に続き、妻登志子との別居を覚悟した時点で『舞姫』を書いた。去らぬ別れのなくもがな。別離が『舞姫』の主題である。

次にもう一人のモデルである小説のクララに話を移そう。小説のクララはハックレンデルの『ヨーロッパの奴隷的生活』の女主人公である。小説のクララは貧しい踊り子であるが、銀行家の次男であり画家でもあるアルトゥールと恋仲である。二人は身分違いの恋を必死に生きる。『ヨーロッパの奴隷的生活』については川上俊之氏による卓抜な筋書きの解説があるので、詳しくはそちら（『鷗外』29）に譲るとして、ここでは荒筋の骨子だけを追うこととする。

クララは貧しい踊り子として父の生計を助けるが、妹の葬儀や父の翻訳を扱う出版社の倒産などにより苦境に立たされる。更にクララは裏で娼婦をしていると言った誹謗に触れ、アルトゥールは怒りと絶望に落とされる。この危機を救ったのはクララの先輩の踊り子であるテレーゼである。テレーゼは生活保護司の婚約者と力を合わせて誹謗の真相を突き止めアルトゥールの誤解を解きほぐし二人の仲を修復する。

更にA という文字を切々と織り込むクララの刺繍を見たアルトゥールの母親がクララのアルトゥールに対するひた向きの愛情をそこに見いだして、二人は結ばれることとなる。ハッピーエンドの物語である。

小説のクララと『舞姫』のエリスの類似は鮮やかで印象的である。身分違いの恋を必死に生きる恋人たちの苦難の物語である。どちらも貧しい踊り子である。細部の類似も目立つ。クララの住まいとエリスの住まいの様子はどちらも四階の屋根裏部屋で酷似している。また恋人であるアルトゥールの錯乱の様子と太田豊太郎の錯乱の様子も極めて似ている。

小説のクララが『舞姫』のヒロインであるエリスのモデルである事は明白である。小説のクララとエリスには違いも目立つ。エリスは身ごもって子を出産するが、小説のクララにはそうした事はない。またエリスは恋人である太田豊太郎に見捨てられるが、小説のクララの濡れ衣は晴れ、二人はハッピーエンドを迎える。こうした違いはどこから生まれたのか。実在のクララもまたエリスのもう一人のモデルであるからである。実在のクララは身ごもり子を生んでいるが、エリスも身ごもり子を生んでいる。また実在のクララは武島務の就職の為に離別しているが、エリスは太田豊太郎に見捨てられ離別している。

小説のクララとエリスの違いは実在のクララに求められる。

一番の違いは次の点である。小説のクララにはテレーゼという味方がいた。テレーゼは小説のクララにとって先輩に当たる踊り子である。貧しい踊り子でありながら、クララを守り救う。貧しくとも精神の自由を失う事のないテレーゼは精神の貴族である。テレーゼは単なる踊り子には止まらない精神の自由な舞姫である。

これに対して『舞姫』にはテレーゼに当たる人物は登場しない。エリスには小説のクララとは異なって救い手が登場しない。『舞姫』にも舞姫のモデルは実在する。それはエリーゼである。だがエリーゼに当たる人物は『舞姫』にはどこにも登場しない。『舞姫』には舞姫は不在である。『舞姫』が悲劇的な結末を迎えるのは舞姫が不在であるからである。『舞姫』の主題は舞姫の不在である。ドイツ人社会には舞姫が実在する。だが日本人社会にはまだ舞姫は存在しない。エリーゼ・ヴィーゲルトの如き自由な精神を持つ精神の貴族はまだ登場していない。エリーゼに当たる別の踊り子が婚約者の軍医と協力してエリスの窮地を救うといったストーリーの展開には至らないのである。

鷗外は自ら味わった清純な青年の恋愛をそのまま描くことをせずに、成熟した大人の恋愛に置き換えて描きあげた。武島務とクララの恋愛が身近な材料とされた。かくて『舞姫』は青年の無力さを痛切な自覚にもたらす作品となった。

エリスに恋をして職を失い艱難を重ねる太田豊太郎の実在のモデルは武島務であって森林太郎では

ない。『舞姫』を鷗外の自伝的な作品と見る見方は全き錯覚の所産である。この錯覚からエリーゼ娼婦説といった奇怪な幻想が繁茂したことは今では良く知られた事実である。

結局カイザーの誤算は鷗外にとって致命的であった。理想のドイツを橋本綱常に奪われてしまったのである。諦念。それが鷗外の人生の到達点であった。

## 5. 決別の文学。

『舞姫』はエリーゼとの別離のやるせなさを形象に結晶させた作品である。悔恨や傷心に鷗外の深い嘆きと悲しみが溢れ出ている。鷗外は何を失ったのか。理想のヨーロッパが目の前で砕け散った。文明開化の理想も失われた。何が残ったのか。文学が残った。医学が残った。

望みはまだある。希望は決して捨てない。絶対に諦めない。エリーゼとの再会の微かな可能性に賭けた作品である。

舞姫とはエリーゼのことである。一月余り築地の精養軒に滞在したエリーゼはドイツに去ってしまう。鷗外がドイツまで迎えに出向かない限り戻ってくることはない。

小柄で金髪のベルリン娘で21才そしてデザイナー志願のお針子というのは、魅力的な女人である。しかもプロイセン軍の兵士の娘である。

これ以上素敵なお人にはそうはお目にかかれそうにない。鷗外は果報者である。エリーゼと過ごした素晴らしい青春の季節を鷗外は『舞姫』の中に永遠に刻したのである。

『舞姫』とは何なのか。決別の文学である。最後の望みを託した作品である。

とはいえ舞姫は戻っては来ない。それは美の女神の化身であるからである。

鷗外はエリーゼとの別れの辛さと切なさを歌舞伎劇に形象化した。『玉篋両浦島』という作品がある。今浦島である森林太郎が別れた乙姫とは独乙姫であった。そして永遠の乙女でもあった。既に古に五節の舞姫をある僧侶はこう詠って賞でかつ惜しんでいる。

「天津風 雲の通ひ路 吹き閉じよ 乙女の姿 しばし止めむ」僧正遍照。

以上。

## 参考文献

武智秀夫 2014 『軍医森鷗外のドイツ留学』 思文閣出版。

(2018年1月10日記)